

企画展 妖怪と自然の博物展

期間：2023年7月1日（土）
～ 2024年1月8日（月・祝）
会場：本館 2階 企画展示室

人はなぜ妖怪を語るのか

日本の各地には、今もなお、様々な妖怪伝承が残っています。近代以前の人びとは、身の回りの不可解な現象の発生要因を「妖怪」のしわざと捉え、自らを納得させてきました。人びとがある事象を理解し、説明するための装置という意味では、妖怪と科学は似ています。妖怪は人びとにとって、自然を理解する（理解しようとする）ための「知」の枠組みでもあったのです。

妖怪は現代においては、アニメのキャラクターなどで広く世界中に知られるようになりました。一方で、そのような造形としての妖怪は、江戸時代以降に急速に広まったものであり、それ以前の社会において妖怪は、キャラクターとして愛するようなものではなく、人びとにわざわざもたらす畏怖の「対象」であり、忌避すべき「事態」でした。妖怪は、人間が不吉なこと、悪いこと、恐ろしいことを実感した時に語られる超自然的存在であったと言えます。さらに、地域社会のなかで妖怪を語り継ぐことで、日常的に発生しうる様々なリスクに備えていたのです。

自然のなかにみる様々な妖怪

本企画展「妖怪と自然の博物展」では、伝統的に地域で語られてきた妖怪を「自然環境」の視点から見つめなおしてみます。動物や植物、地質、自然災害などの標本・資料を展示し、それらが妖怪・怪異として語られる様々な事例や背景を紹介・解説します。例えば、平家物語のなかで源頼政に退治された鶴（ぬえ）という妖怪(図1)は、一

説には顔は猿、体は狸、手足は虎、尻尾は蛇の姿をしており、夜に不気味な声を発していたといわれています。鶴の伝承のモデルとなったのは、その字のごとく「夜に鳴く鳥」であり、トラツグミ(写真1)の鳴き声だったと考えられます。本企画展では、「怪音」のコーナーを設けており、少し薄暗い展示ブースの中で怪しげなトラツグミの鳴き声を聞くことができます。

また、人間の生活空間に現れるキツネやタヌキといった動物は、人を化かすといわれてきました(写真2、図2)。興味深いのは、妖怪として語られたキツネやタヌキが、時に人間とコミュニケーションを図ったり、お互いを助け合うなど、対等の



図1 歌川芳員「源頼政鶴退治之図」

立場として語られていることです。不可解な事象を理解しようとする努力だけでなく、「わからないことをわからないこととして」そのままに捉え、ユーモアを交えながら社会的に対処していく姿勢が、過去の日本人にはみられるのです。ここに、現代においてわたしたちが、複雑な自然環境とうまく付き合っていくためのヒントが隠されているのではないのでしょうか。

みえないものをみようとすること

日本の妖怪文化の大衆化に最も貢献した漫画家の水木しげるは、妖怪をみるということは「見えないものを無理矢理見るとのこと」だと述べて



写真1 鶴とも呼ばれるトラツグミの剥製



写真2 薄暗い館内でのキツネの剥製

います。本来的に日本人は、自分たちにわざわざもたらす超自然的存在としての妖怪の姿形を積極的に描いてきませんでした。しかし、自分たちが実際に生きている物理的環境の背後に、みえない存在としての妖怪をみようと、不可解な事象も含んだ複雑な自然環境を「全体」として捉え、適切に資源を管理し、リスクに備え、さらに自らの行いを律してきました。本企画展は、「妖怪」を介して身近な自然環境の「新しい見方」を獲得するきっかけとなることを目指しています。多くの人が、みえない存在としての妖怪に深いまなざしを向けてくれることを願いながら、ご来館を心よりお待ちしております。

高田知紀(環境計画研究グループ)



図2 歌川広重「王子装束系の木大晦日の狐火」